

三好徹 天使 全作品 5

黒い天使

三好 徹



黒い天使 三好 徹「天使」全作品 5

三好 徹

昭和53年 1 月 15 日 第 1 刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国オフセット株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社若林製本工場

© Toru Miyoshi 1978

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

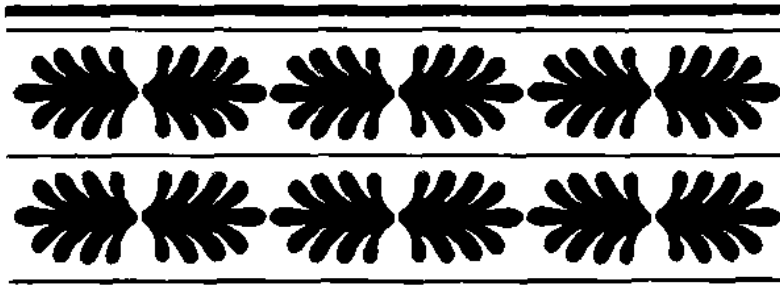
(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

社文庫

黒い天使

三好徹「天使」全作品 5

三好 徹



目次

黒い天使

天使のほくろ

天使の棄児

天使と毒薬

天使の宝石

天使の陰画

不純な天使

解説

権田萬治

七

四九

八九

一三七

一七五

二三三

二七一

三三七

黒い天使

1

その事故を目撃したのは、ある女のところへ会いに行く途中だった。私は夜勤で、夜の十時までは県警本部の記者クラブにいたのだが、九時ごろに、女から電話がかかってきたのである。女は律代という名前で、中華街のバーに勤めていた。

正直に言って、私は気が進まなかった。夜勤だから行けないと行って、いったんはことわった。といっても、律代の店は、そんなに勘定が高いというわけではなかった。また、彼女が男心をそそらぬということでもなかった。むしろ、くびれた胴や豊かな胸は、魅力にみちているといえるだろう。顔だって表情に変化があるし、会話も気がきいている。多少の勘定は残っていたが、とりたてて、ことわる理由はなかったのだ。

夜勤だから駄目という私の答えを聞いた律代は、

「夜勤というのは十時に終わるのでしょう？」

といった。

そのとおりだった。ぶっきらぼうに私は答えた。

「まアね」

「十時過ぎでいいの。ぜひお話したいことがあるんです。お店じゃなくなっちゃった方がいいのよ。会って

「くださいな」

「そういわれても、心を動かさないほど、私の心はタフではなかった。」

「わかった。じゃ、店へ行くよ」

「いいえ、お店ではかえって困るわ。山下公園に面した通りにホテルがあるでしょう？ あそこの喫茶室でお待ちしているわ」

彼女の勤めている店とそのホテルとは、少し離れているが、私の方からはかえって近い。

そういう心遣いを見せられると、私は抵抗できないたちだった。大事件が起こって帰れなくならない限りは、十時十分ごろには行く、と約束した。

残りの一時間に、事件は何も発生しなかった。私は支局で宿直番になっている東野に連絡をとって、十時に県警本部を出た。

あたり一帯は、官庁や会社のビルが林立しているので、昼間はかなりののにぎわいを見せているのだが、その時間になると、人通りは少なかった。車のライトが、ときどき、暗いひろがりをつぶたつに裂くが、歩いているのは私だけであった。

ギ、ギ、ギと激しくきしる音がしたのは、公園に通ずる海岸通りへ出たときだった。一台の乗用車が、路上に急停車し、なかからひとりの男が出てきた。

男は車の後方へまわった。それから、急いで車に乗りこみ、走り去った。私は、車が国産車であることや、男が出てきたのは、後部の右側のドアであることを、漠然と意識しながら、車の去ったあとに、黒い荷物のようなものが残されているのを見た。

私は足を速めた。そこまでの距離は五十メートルくらいのものであったろう。

路上には、ひとりの男が倒れていた。そばに皮の鞆が投げ出されていた。私はかがみこんだ。男の顔がスリむけて、血が流れていた。が、息はある。

私は、二十メートルほど先にある公衆電話へ行き、一一〇番へ電話をかけた。一一九番の方が本当だったろうが、そのときは慌てていた。

係官は、私からの連絡を感謝しながら、名前と住所をたずねた。そのまま、切ってしまってもよかったが、別段、隠すこともなかった。私は、勤めている新聞社名と名前をいい、

「残念ながら、轆ひき逃げした車のナンバーは見そこなってしまったんだ」といった。

「車の型はご記憶ですか？」

「国産車でタクシーなんかによく使われている型だね。色は黒塗りだった。運転手のほかに、後ろに乗っていたやつがいたな、そいつが、いったん外へ出てきて、すぐさま車内に入り、あとはフルスピードで逃げてしまったんだ」

「ほかには何か？」

「とくに思い出せないけれど、救急車を早く手配した方がいいよ」

私は、電話ボックスの中からいつしか、人だかりがしてきたのを見た。

現場に戻り、救急車がくるのを待った。鞆をとられないように注意していた。すぐにパトカーが来た。それから救急車だった。

私は、パトカーの巡査に名刺を渡した。巡査は、私が県警本部に詰めている警察記者だと知ると、奇妙にこわばった敬礼をした。私はてれくさかった。

「人を待たせているんで、ちょっと失礼するけれど、もし必要があるならば、あとで支局へ電話してください」

「はいッ」

巡査は再び敬礼した。時計を見ると、十時半になっていた。

私は、ホテルまで足をはやめた。

喫茶室には律代が待っていた。私は、合図を送ってから、入口のところにある電話で支局へかけた。すぐに東野が出た。私は事情を説明し、

「いずれ、交通の方に報告が行くだろうが、被害者がどうなったかだけは、忘れないようにチェツクしてくださいか」

「ええ、わかりました」

と、東野は緊張した声で答えた。私は、

「おれが見たときは、まだ息があった。本人の意識が回復すれば、警察はその人から事情聴取をするだろうが、もし死亡してしまえば、証人としておれを必要とするようになるだろう。そのときは、支局へ連絡してくるだろうからね、十一時ごろには戻るからといってくれ」

「いまどちらです？」

「山下公園の前のホテルの喫茶室だ」

「おデートですか？」

「バカ、余計なお世話だ」

東野は、えッへッへッ、といった。

私は律代のいるテーブルにすわり、コーヒーを注文した。

「遅れてすまなかったが、事件にぶつかってね」

「じゃ、これからお出かけ？」

「できることなら、このままきみといっしょにいたいものだな」

「でも、そうもいかないでしょう？」

「きみの話は長くかかるのか？」

「ええ」

「三十分じゃ無理か？」

「三十分なんて！」

律代は、憤慨したようにいった。

私は彼女に憤慨されるいわれはなかった。私の方から彼女に頼んだわけではなかった。

「どういう話なんだい？」

「三十分しか余裕がないんでしょ？」

「まアね」

「三十分じゃとても無理よ。あした会ってくださる？」

「時間によりけりだ」

「ご都合のいいときでいいわ。でも、三十分やそこいらではなくて、もっと時間をいただきたいの」と、律代は押しつけがましくいった。

電話をかけてきたときは低姿勢だった律代が、どういうわけか、高姿勢になっていた。十時十

分までには行くといったにもかかわらず、遅れたせいかもしれない。そのうえ、三十分以内にしてくれ、といわれたので、俗にいう頭にきたのであろう。

だが、それは私が悪いわけではない。私は故意に遅れたわけではなく、偶然に事故を目撃したからなのだ。記者として、あのまま行き過ぎることはできなかつた。かりに記者ではないとしても、あたりまえの人間の心をもっていれば、私と同じように行動したにちがいない。

「わかつた。それじゃ、夕刊の締め切りが終わつたころにしよう。しかし、念のために、三時ごろに電話してくれないか」

「三時ね。で、場所は？」

「記者クラブにいるから、場所はそのときに決めようじゃないか。ことわっておくが、もしその前に事件が起こつていけば、出かけるようになるからね」

「仕方がないわ」

と、律代は承知した。

喫茶室を出て、彼女と別れた。支局へ戻る途中に、事故のあつた場所を通りかかつた。交通係が出てきていて、巻尺で計測したり、印をつけたりしていた。

支局では、東野が下着一枚になつて、詰将棋に熱中していた。かれは私を見ると、

「例の事故、被害者は全治一カ月くらいの重傷ですけど、命には別条はないらしいですよ。原稿は一応送っておきました」

私は、本社との直通電話の横にある、原稿の束をめくつてみた。

「被害者のくわしい氏名がわからんのかね？」

「原稿にも書いておいたけど、背広のネームに倉田とあるだけで、名刺も定期もなかったそうですよ」

と、東野はいった。

2

加賀町署の松谷警部から電話がかかってきたのは、翌日の昼前だった。私は、朝食兼用の昼飯をとり、外へ出かけようか、それとも店屋モノをとり寄せようか、と迷っているときだった。松谷は、私であることを確かめてから、

「いま、本部の受付のところから電話しているんだけど、ちょっとつきあってくれるかね？」
といった。

私はそくぎに承諾した。

松谷は、受付の前でタバコをふかしていた。私を見ると、親しげに手をあげ、

「ゆうべは、あんたの世話になったそうだね」

「世話というほどのことはしていないさ」

「食事はまだだろう？」

「食へに行こうか行くまいかと迷っていたところだ。久しぶりに、いっしょに食へようか」

私の誘いを、松谷はうけた。私たちは、本部を出ると、県庁の近くにあるそば屋へ行った。松谷は定食をとり、私は天ぷらそばを注文した。

「話はなんだい？」

と、私はいった。

「話というほどではないが、ゆうべの事故の一件でね。轢き逃げだから捜査しなければならんだ。あんたが唯一の目撃者だから、事情を聞いておきたいわけさ」

「参考になるようなことは、あまり喋れないよ。せめて車のナンバーでも見ておけば、有力な手がかりになったのだろうが、ナンバー・プレートが白か緑かさえも見えていないんだ」

「車をとめてから、出てきたのは、後ろのシートにいた男だった？」

「そうなんだよ。運転手は出てこなかった。そのまま、急いで逃げてしまったな」

「被害者が歩いているところは見なかったかね？」

「見なかった。急停車の音がしたんで、はじめてそっちを見たんだ」

「出てきた男の背かっこうなんかは？」

「そうだなア、大男というほどではないような気がするが、でも、背はおれよりは高かったかもしれない」

私は一メートル七十センチだった。それを松谷にいつてから、

「でも、正確なことはいえないぜ。あくまでも、印象だけなんだ」

と付け加えた。

松谷はうなずき、なにか考えこむ眼差しになった。こんどは、私が考えこむ順番であった。

松谷とは、かれが警部補だったころから知っている。事件を解決したとき、デカ部屋で行なわれる打ちあげに加わって、ヤカンであたためた酒をいっしょにのんだことも何回かある。が、それはなにも私だけではなく、他社の記者も同席している。

私たちのつきあいは、記者と警察官である限界を越えることはなかった。かれが職務に熱心な警察官であることは認めるにしても、同時にまた、警察官としての用心深さもその内側に持っていた。こちらから何かを訊けば、差し支えない限りは答えてくれるが、それ以上のことは決してしなかった。

「松谷さん、被害者は重傷だった？」

「一カ月だそうだ」

「本人はどういっているんだい？」

「それがね、駄目なんだよ」

「まだ意識不明なのか？」

「意識は回復したが、ショックで記憶喪失になってしまったらしいんだな。こちらの質問に答えられないわけだ」

「年齢は？」

「五十三、四というところかな。会社の部長さんといったところだろう」

「身許はわかったんだらう？」

「なにしろ、記憶をなくしちゃまっているんでね」

「自分の名前もいえないのか？」

「まア、そんなところだね」

「鞆があったと思うんだがね」

「ああ、あったな」